

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 14 日現在

機関番号：14501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2014

課題番号：25590174

研究課題名(和文) 生殖期女性における生物学的生殖性と心理学的生殖性の関連と統合に関する研究

研究課題名(英文) A study on the relation and integration of biological generativity and psychological generativity in reproductive stage women

研究代表者

齊藤 誠一 (SAITO, SEIICHI)

神戸大学・人間発達環境学研究所・准教授

研究者番号：60186939

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：初経から閉経に至る期間にある女性が、月経、妊娠、出産など自己の生物学的側面について、それをどのように受容し、そのありようが妊娠、出産、子育てにどのように関わり、そうしたことが生命観や世代継承性にどのように影響するかを検討したところ、妊娠・出産がより具体的に生命の重要性を認識させること、妊娠から子育てまでの経験が「世話すること」と「自己の生きた証を次世代に残す」という形での世代継承を促すこと、出産しないことが更年期になって心理的葛藤を生じさせていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：We researched how women in the period from menarche to menopause accept their biological aspects about women's reproductive function such as menarche, pregnancy, birth and menopause, how these acceptance are related to experiences of pregnancy, birth and child-rearing, and furthermore how these relations affect their view of life and death, and their developmental task of generativity. Results are as follows: 1) Experiences of pregnancy and birth had them recognize the importance of life; 2) Experiences of pregnancy, birth and child-rearing had them achieve the developmental task of generativity by taking care of their child and others, and telling new generation people their life history; 3) In menopause not bearing a child brought them to the psychological conflict about their reproductive function.

研究分野：発達心理学

キーワード：生殖性 ジェネラティビティ 月経 妊娠 出産 生命性

1. 研究開始当初の背景

欧米では、思春期(初経)および更年期(閉経)の心理的影響について、生物学的医学的観点も含めた多様な観点で検討がされてきたが、いまだ十分な説明がなされていないとされている(Zucker, 2001)。また、国内では、思春期および更年期について、これらの時期に付随する身体的変化が一定の影響をもつこと(齊藤, 1985; 上長他, 2006; 田仲, 2011)や、月経が心理的諸側面に影響を与えていること(川瀬・森, 2001)が明らかにされている。しかしながら、これらの研究では、月経、初経、閉経といった単一のイベント、思春期、更年期といった単一の時期からの検討にとどまり、長期間にわたる生物学的生殖性の観点から心理学的側面に対する検討はなされていない。とくに月経前症候群(PMS)を含む月経前後の不快症状(月経周辺症状)は、約40年間の生殖期間にわたり、女性にしか経験されない点できわめてユニークな身体的イベントと言える。本研究ではこうした月経周辺症状をはじめ、妊娠、出産、更年期過程として経験される生物学的生殖性とジェネラティビティ形成など心理学的生殖性との関連の解明をめざすものである。

2. 研究の目的

生殖期女性においては25~28日の性周期が存在するが、主観的には月経の前後に生じる不快な身体的・心理的状态を伴う月経周辺症状として経験される。この周期は初経から閉経までの約40年にわたり繰り返され、生殖期女性は月経のたびに自己の生物学的生殖性に直面させられるが、Eriksonの提案するジェネラティビティなど広義の心理学的生殖性との関連については検討がなされていない。そこで、本研究では、生殖期女性が生物学的生殖性として経験することとして、性周期ごとに経験するPMS(月経前症候群)など月経及びその周辺症状、妊娠・出産、それに続く子育て、さらに生物学的生殖性が停止する閉経とそれに至るまでの更年期を取り上げ、それをどのように受け入れ、心理学的生殖性へ意味づけるのか、そうしたことが生物学的生殖性と心理学的生殖性の決断となる妊娠・出産・子育てにどのように影響するのか、さらには世代継承性課題であるジェネラティビティ形成に対してどのように影響するかについて検討を行う。

3. 研究の方法

(1)量的検討(研究1~5): 青年期、成人期、中年期などの男女を対象として、生物学的生殖性の指標として妊娠・出産・閉経、PMS症状、子育て経験などを、心理学的生殖性として「ジェネラティビティ」、ジェネラティビティの対極にある「生と死の価値観と態度」などを内容とした質問紙調査を行った。

(2)質的検討(研究6): 30~50歳代の成人期女性を対象として、生物学的生殖期の後半期

に関わる心理学的生殖性などについて半構造化面接を行った。

4. 研究成果

(1)研究1: 子育て経験とジェネラティビティ形成との関連の検討

青年期にある関西在住の大学生102名(平均年齢19.06歳, SD=.83)、成人期前期にある第一子妊娠中の女性およびそのパートナー42名(平均年齢30.48歳, SD=6.70)、中年期男女112名(平均年齢51.41歳, SD=3.91)に対して、心理学的生殖性として「世代性」を取り上げ、「世代性関心と世代性行動尺度」(丸島・有光, 2007)のうち「世代性関心」20項目(「創造性」8項目、「世話」7項目、「世代継承性」5項目)などについて質問紙調査を行った。

子育て経験による影響を検討するため、発達段階(青年期・成人期前期・中年期)×性別の2要因分散分析を行い、以下の結果を得た。まず、「世話」において有意な交互作用が認められ、単純主効果の検定の結果、中年期女性の得点が成人期前期女性や青年期女性より、中年期において女性の得点が男性より高かった。また、「世代継承性」において発達段階の有意な主効果が認められ、多重比較の結果、中年期の得点が青年期より高かった。さらに、「創造性」において性別の有意な主効果が認められ、多重比較の結果、男性の得点が女性より高かった。

これらの結果から、自分を起点として新たなものを作り出していくという「創造性」は男性が高かったが、自分より弱者を援助するという「世話」は中年期女性が青年期女性、成人期前期女性より、中年期では女性が男性より高く、次世代に自己のありようを伝えていくという「世代継承性」においては中年期が青年期より高かったことが明らかになり、子育て経験が女性には「世話」を通して次世代を育てるジェネラティビティを、男女とも自己の有り様を次世代に伝えるジェネラティビティを高めるものといえる。他方、妊娠中女性に顕著な特徴が見られず、妊娠それ自体だけではジェネラティビティ形成には大きな影響を与えないことが示唆された。

(2)研究2: 妊娠・出産・育児経験と成人期女性の「生と死に対する価値観および態度」との関連の検討

妊娠・出産・育児(乳幼児に対する子育て)が未経験である女子大学生71名(平均年齢18.9歳)、妊娠中女性23名(平均年齢29.7歳)、育児中女性95名(平均年齢34.9歳)を対して、「生と死に対する態度尺度」(田中, 2014)25項目(「生への態度」:「人生の目的・希望」7項目、「命に対する態度」8項目/「死への態度」:「死に対する不安・恐怖」4項目、「死後の生活への信念」3項目、「周囲への配慮」3項目)などについて質問紙調査を行った。

妊娠・出産・育児経験による影響を検討するため、女子大学生、妊娠中女性、育児中女

性の3群について1要因分散分析を行い、以下の結果を得た。すなわち、「命に対する態度」において育児中女性の得点が女子大学生より、「死への不安・恐怖」において女子大学生の得点が妊娠中女性および育児中女性より、「周囲への配慮」では妊娠中女性の得点が女子大学生および育児中女性より有意に高いことが明らかになった。

これらの結果から、妊娠・出産・育児を経験することが命の重要性をより強く実感させること、妊娠あるいは妊娠・出産・育児を経験することが死に対する不安や恐怖が低下させること、妊娠は自己の死は周囲の人間に迷惑をかけるという周囲への配慮を上昇させることが示された。すなわち、自分の身体に新たな命を得るという妊娠が自己の死がもたらす周囲への影響を認識させる一方、いくつかの生死に関わる事態を経る妊娠から子育てが死に対する観念的な恐怖を減じさせるとともに命の重要性を認識させることが示唆された。

(3)研究3：結婚することと子どもを持つこと「生と死に対する価値観および態度」との関連の検討

関西在住の男性 151 名（未婚 56 名，既婚 95 名 / 子どもあり 85 名・子どもなし 10 名），女性 165 名（未婚 38 名，既婚 127 名 / 子どもあり 121 名・子どもなし 6 名）（平均年齢 32.74 歳，SD=7.03 歳）を対象に「生と死に対する態度」（研究 2 と同じ）などについて質問紙調査を行った。

婚姻状況による影響の検討するため、婚姻状況×性別の2要因分散分析を行い、以下の結果を得た。婚姻状況の有意な主効果が「周囲への配慮」、「解放としての死」において認められ、多重比較の結果「命に対する態度」、「周囲への配慮」では既婚者の得点が未婚者より、「解放としての死」では未婚者の得点が既婚者より高かった。また、性別の有意な主効果が「死への不安・恐怖」と「死後の生活への信念」において認められ、「死への不安・恐怖」では男性の得点が女性より、「死後の生活への信念」では女性の得点が男性より高かった。

子どもの有無による影響を検討するため、子どもの有無×性別の2要因分散分析を行い、以下の結果を得た。「命に対する態度」、「周囲への配慮」、「解放としての死」において子どもの有無の有意な主効果が認められ、多重比較の結果、「命に対する態度」および「周囲への配慮」では子どもを持つ人の得点が子どもを持たない人より、また「解放としての死」では子どもを持たない人の得点が子どもを持つ人より高かった。さらに、「死への不安・恐怖」、「死後の生活への信念」において、性別の有意な主効果が認められ、「死への不安・恐怖」では男性の得点が女性より、「死後の生活への信念」では女性の得点が男性より高かった。

これらの結果から、結婚や子どもを持つことにより、命をより重要なものと感じるようになり、自らの死による周囲の人への配慮をするようになる一方で、死を現世からの解放であるとする考え方をしなくなることが示唆された

(4)研究4：パートナーの妊娠・出産・育児「生と死に対する価値観および態度」との関連の検討

青年期にある関西在住の男子大学生 28 名（平均年齢 19.50 歳，SD=1.20 歳），パートナーが第一子妊娠中の男性 16 名（平均年齢 32.25 歳，SD=8.13 歳），育児中男性 60 名（平均年齢 34.38 歳，SD=3.22 歳）に対して「生と死に対する態度」（研究 2 と同じ）などについて質問紙調査を行った。

大学生（パートナー無 / 子ども無）・パートナー妊娠中男性（パートナー有 / 子ども有・妊娠中）・育児中男性（パートナー有 / 子ども有・育児中）の3群について、1要因分散分析を行い、以下の結果を得た。「死に対する不安・恐怖」、「周囲への配慮」においてパートナー状況の有意な主効果が認められ、多重比較の結果、「死に対する不安・恐怖」では男子大学生の得点がパートナー妊娠中男性より高く、「周囲への配慮」ではパートナー妊娠中男性の得点が男子大学生や育児中男性より高かった。

これらの結果から、パートナーが妊娠することにより死に対する不安や恐怖は減じ、自己の死が周囲に影響を与えるになるという周囲への配慮が高まることが示さ、妊娠中女性と同様に心理的变化が見られることが示唆された。

(5)研究5：PMS 症状と親性準備性との関連の検討

九州地方の女子大学生 145 名を対象に PMDD 評価尺度（宮岡ほか（2009）を一部変更した 25 項目）など月経関連変数、親性準備性尺度（佐々木，2007）などについて質問紙調査を行った。

月経前症候群については、31 名（21.8%）が発症を、44 名（31.0%）が発症傾向を経験し、67 名（47.2%）には発症経験がなかった。したがって、約半数の者には生物学的生殖性の一兆候である月経前症候群症状が性サイクルの中で生じ、身体的、心理的不快を経験させているものといえる。この発症の程度と心理学的生殖性としての親性準備性との関連を検討したところ、「育児への抵抗感・否定」では PMS 発症者の得点がそうでない者より有意に高く、こうした症状が妊娠・出産と結びつき、さらにその結果として生じる子育てに対してネガティブな感情をもたらしていることが明らかになった。さらに、PMS 発症者では、将来家族のサポートが期待できる場合は期待できない場合より「育児への抵抗感・否定」が有意に低くなっており、サポート期待が防御変数になっていることも明

らかになった。

(6)研究6：成人女性の生物学的生殖性と心理学的生殖性に関する質的検討

30歳代から50歳代の成人女性8名を対象に、子どもを持つこと、出産への意識、妊娠・出産・子育てに関わる体験などについて半構造化面接を行い、以下の結果を得た。

子どもを持つことや出産への意識では、すべての対象者が自分自身の課題として妊娠・出産に対する考えを述べており、妊娠・出産の経験の有無に関わらず女性自身の中で「産む性」であることが意識されていたが、とりわけ出産経験のない女性においては、生殖性に関する意識や性成熟期から非成熟期へと向かう中で次のような特徴みられた。

子どもを持つことは、20代から30代頃にかけてはあまり疑問を抱くことなく、この先の人生の中で結婚、妊娠・出産といったライフイベントを自然に経験していくと考えられていた。その後、成人前期から中年期に向かう中で、主に40歳という年齢が契機になって、自らの出産能力のリミットを意識し始めるとともに、その事実に関心を感じている女性もみられた。妊娠・出産はパートナーがあってはじめて成立するものとする女性にとっては、自分自身のみの判断で妊娠・出産をコントロールすることは困難であるために、妊娠・出産可能期間の終わりを意識しながらも具体的な行動には結びつきにくい葛藤状況が推測された。

さらに、50代の女性において、自らの生殖性について振り返ると、妊娠・出産という形で生殖性を発揮してこなかったことに対する後ろめたさや自らの選択に対する問い直し、世代のつながりの危機が経験されていることが示された。ライフコースの多様化が進む現代においても、「産む性」であるという価値観は女性自身にも内在化されており、それとは一致しない、つまり子どもをもたない生き方をしてきたということが、生殖期の終わりに近づきつつある中年期において葛藤を生じさせている1つの要因となることが考えられる。子どもをもたないがゆえに自分のためだけに生きてしまったという感覚や、自分という存在が次の世代につながっていかないという感覚は、中年期の心理・社会的発達課題であるジェネラビリティの危機と関連するものと考えられる。加えて、生殖期の終わりを認識しながらも、どこかで「子どもを産み育てることができる」という生殖性に対する期待を抱えたままの状態が継続していく場合があることが示唆され、生物学的生殖性の終わりを意識しはじめてから、受容・振り返りへと至るまでには一定の期間を要すること、またそのプロセスには個人差があると推察された。

(6)得られた成果の位置づけ

本研究では、生物学的生殖性と心理学的生

殖性について以下の点が明らかになった。自己と子の二つの生命を自己内に持つ妊娠経験が自己の死がもたらす影響の強さを認識させ、この二つの生命の生と死に関わる事象を経る妊娠から出産、乳幼児の育児までの経験が死に対する観念的な恐怖を減じさせるとともに命の重要性を認識させた。妊娠それ自体だけではジェネラビリティ形成には大きな影響を与えないが、育児以降の子育て経験は、女性に「世話」を通して次世代を育てる再生産としてのジェネラビリティを、男女とも自己の有り様を次世代に伝える自己継承性としてのジェネラビリティを高めた。さらに、結婚して子どもをもつことにより、生命が重要なものであり、自らの死が周囲に与える影響が大きいことを認識させ、死を現世からの解放であるとする考え方を低めた。ほとんどの女性において不可避な性サイクルにおける月経および関連兆候は、PMSとして不快なものとして強く経験とされると、月経と関連する妊娠、出産につながる子育てに対してもネガティブな感情をもたらした。女性自身にはいまだ「産む性」という認識、すなわち生物学的生殖性=心理学的生殖性という認識が強く、出産経験のなさは他者への世話では代替できない生殖性に関わる未達成感と葛藤を生じさせた。以上のことは、これまで心理学、医学、看護学などで独立に検討されていたものであり、本研究で生物学的生殖性と心理学的生殖性の概念によりまとめた試みは意義深いものと思われる。今後は、子孫の保存・繁栄という生物学的機序に基づく生殖性を心理学的生殖性に高めていく道筋とその意味について検討する必要がある。

5. 発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

田中美帆・齊藤誠一、生と死に対する態度研究の概観と展望、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、7巻、pp. 181,186

〔学会発表〕(計4件)

田中美帆・齊藤誠一、成人期の生と死に対する態度の検討 成人期前期に経験されるライフイベントに着目して、関西心理学会125回大会、2013.11.3、和歌山市(和歌山県)

田中美帆・齊藤誠一、The Influence of Personal Experiences on Attitudes towards Life and Death among Japanese Adults, ISSBD 2014 23RD BIENNIAL MEETING, 2014.7. Shanghai(China)

田中美帆・齊藤誠一、出産育児経験が成人期女性の生と死に対する価値観および態度、日本女性心身医学会第43回学術集

会, 2014.8. 京都ホテルオークラ(京都府)

田中美帆・齊藤誠二, 世代性関心の発達の变化についての検討, 日本教育心理学会第56回総会, 2014.11.10, 神戸市(兵庫県)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齊藤 誠一 (SAITO, Seiichi)
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・
准教授
研究者番号: 60186939

(2) 研究分担者

則定百合子 (NORISADA, Yuriko)
和歌山大学・教育学部・准教授
研究者番号: 10543837

上長 然 (KAMINAGA, Moyuru)
佐賀大学・文化教育学部・准教授
研究者番号: 50552965

田仲 由佳 (TANAKA, Yuka)
清泉女学院大学・人間学部・助教
研究者番号: 30621122

(3) 研究協力者

田中 美帆 (TANAKA, Miho)
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・
後期課程大学院生